

毎月1回20日発行

(昭和31年3月28日第三種郵便物認可)

山と博物館

編集 大町山岳博物館



クロスズメバチ
Yespula Lewisi Cameron

俗にスガレ(長野)、ヘボ(山梨)、などとも呼ばれるこの蜂は日本の各地に産し、カラフト・朝鮮・満州にも分布している。幼虫や蛹は「蜂の子飯」に使われたりカンズメとして売り出されたりしている。写真はコウロギの肉をかむ働蜂

NO. 21 1957年9月20日

大町山岳博物館 発行

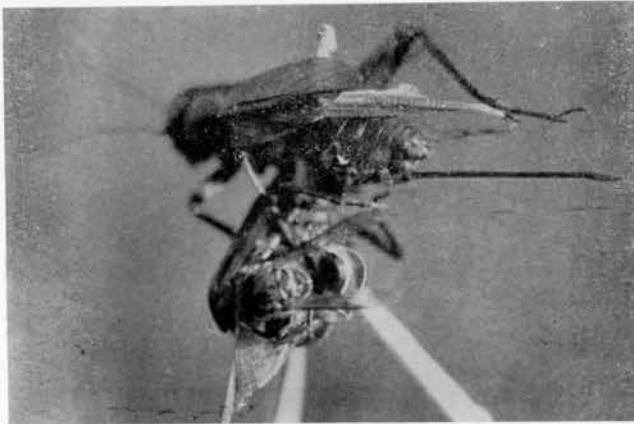
スガレを追って



秋の七草も咲きそろい、ススキの穂が秋風になびくようになると、子どもたちにとって楽しい蜂追いの季節がやってきます。地蜂の巣を掘って「蜂の子」をとるならわしは長野・山梨県下の地方では大へ

ん広く行なわれているようです。この地方でスガレまたはヂスガレと呼ばれるこの地蜂は和名をクロスズメバチといい、体長は働き蜂で12mm内外、黒い腹に数条の白い帯のある美しい蜂です。

クロスズメバチの巣をさがすには、えさを集めに来る働き蜂を見つけ、これに目じるしの真綿をつけた肉だんごをだかせて飛ばせ、その後を追うのです。この蜂が好んで集まるところはカラマツの枝です。蜂の多い秋でしたらカラマツの木をさがせば、蜂を見つけることはたやすいことです。蜂を見つけたらバツタやカエルをくしざしにしたえさをそっと蜂の前にさし出して、これにとりつかせるのです。蜂はくしざしから肉だんごをかみとることでそれこそ一心です。



コオロギの「くしざし」を見つけたクロスズメバチはえものの上にとりつくと、すぐ大あごで肉をかじりはじめる。



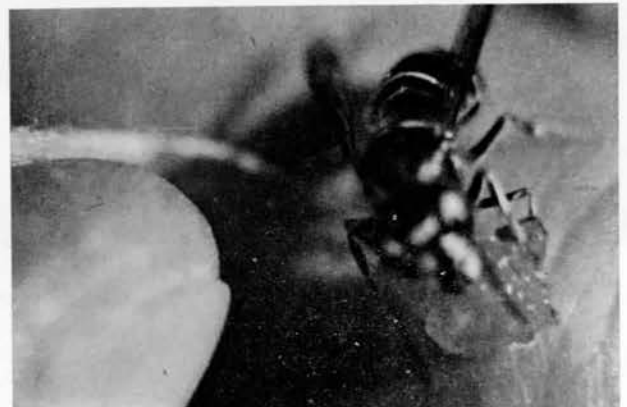
土をくわえて出ていくもの、えさを持って帰ってくるもの、トンネルの入口は飛行場を思わせる。写真は巣門と巣門をまもる番兵蜂。



肉をさがしに来ているはたらき蜂をえさにとりつかせる

適当な大きさの肉片を切り取った蜂は、前足と口で上手に丸めておだんごにしてから胸の下へかかえ込み、後足を数回すり合せた後、静かに飛び立ちます。飛び立った蜂は頭をえさの方に向けながら次第に遠ざかり、えさの形や位置をはっきりとおぼえ、それからだんだん大きく円く廻って、あたりの土地の形をしっかりとおぼえこむと巣の方向をみざして、一直線に飛んでゆきます。数分あるいは十数分もすると蜂は再びやってきます。彼女は巣に帰って肉を巣の中で働いている若い妹たちに渡して来たのです。蜂がえさにもどって来たなら、あらかじめ用意しておいた真綿のついた肉だんごをおしつけてだかせます。この真綿をひいて飛び帰る蜂の後を追って巣の入口を見つけるのです。あとは煙硝かセルロイドを巣の入口でいぶし蜂をよわせて（仮死状態にして）から急いで掘るだけです。

クロスズメバチは砂地、黒土、赤土、などいろいろな土質のところに巣を作りますが、その場所は草原や雑木林の地中、特に西南に面し、わりあい乾いた暖い斜面であることが多いのです。まれには枯木のうろの中や、屋根のすき間などに作ることもあります。巣の入口は直径3cm程の楕円形をしており、必ず一匹以上の門番(警戒蜂)が見はっております。いたずら者のガマや赤アリやハチクマ(タカの仲間)が「蜂の子」をとりやってくるからです。巣の入口からゆるく傾斜したトンネルを10~50cmも入ると、そこにボールのような形の巣があります。巣の外側は、木材をかみくだいて作ったバルブの外殻で包まれており、その中に何段



クロスズメバチは人間のゆびなどには注意しない、しかし目印の真綿がじやまになるので糸をかみ切ろうとする。



かの「蜂の子アパート」が重なっております。このアパートもバルブで出来ており、六角形をしたたくさんの巣房（すぼう）がきちんと並んでおります。一番上の段が一番古く、女王蜂が自分で作った部分を中心となっております。秋の終りまでには普通7～8段の巣が作られるのです。上の3～4段は小さな巣房が並んでおり、この中に働蜂になる「蜂の子」や「さなぎ」が入っております。その下には大きな巣房が並んだ雄蜂の段（王段）があり、一番下に更に大きい巣房の女王段が1・2段ついています。

サクラの花が散り若葉が野山をみどりにする頃、一匹の女王蜂は小さな巣を作って数十匹の働蜂を育てます。この働蜂が成長すると女王蜂はもう巣から外へは出なくなり、彼女は巣の中にいて卵を産み続けるのです。働蜂は不完全な雌蜂であり卵をうむことができません。彼女らはまわりの土をけずって運び出し巣の穴を広げるもの、木の皮を取って来て巣を増築するもの、えさを運んで来るもの、巣の中にいて幼虫にえさをくれるもの、入口の警戒に当るものなどに別れて仕事を進めます。暑い真夏には、早朝と夕方うんと働いて、日中は巣の中で休んでいます。「さなぎ」から成虫になったばかりの働蜂はまだはねが弱くて飛ばせませんから、巣の中の仕事を手伝っておるようです。

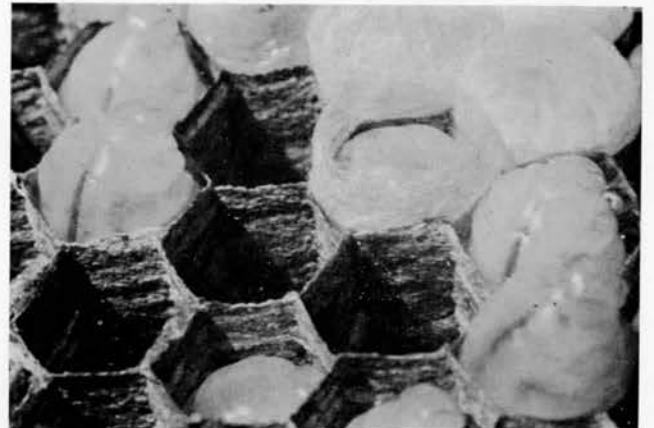
8月も半ばを過ぎると、そろそろ王段が作られます。その巣房の中に女王蜂は雄蜂となるべき卵をうみ込みます。この頃は蜂の数も数千に達し、蜂の王国はにぎやかになります。9月に入ると女王段が作られ、この大きな巣房の中に女王蜂は雌になる卵をうみまします。王女として育てられた雌蜂が巣から飛び出すのは



【写真左】働き蜂の育ちかた。左から巣房のかべにうみつけれられた卵、2番目～5番目は幼虫、6・7番目は蛹、8番目は成虫。
 【写真下】クロスズメバチの巣盤。左は地下第三階で働蜂育成用、中央は地下第五階で雄蜂用、右は女王蜂用。この巣の場合1～3段は働蜂用、4段は働蜂と雄蜂用、5段は雄蜂用、6段は女王蜂用となっており、第一段の中央部はすでに四回利用されておるが、第6段ははじめての卵が中央部にうみ込まれたばかりである



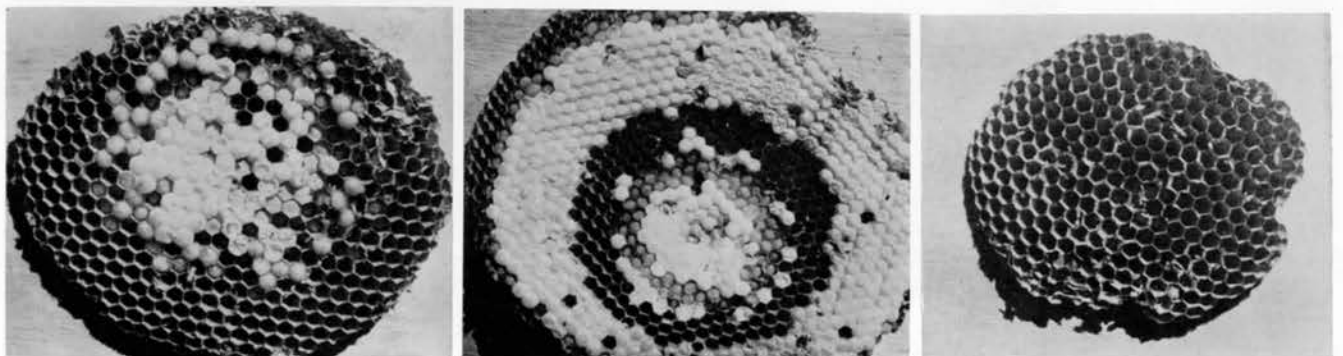
女王蜂は腹部が大きく、暗い巣の中にあつて卵をうみ続ける。写真は巣房から出たばかりのはたらき蜂を見まもる女王ばち。



成じゆくした幼虫は口から絹糸を出して巣房にふたをする。

10月中旬から11月にかけてです。一度巣から飛び出した王女たちは再びもどってきません。天気の良い日、カマツツの梢などに止って雄蜂と交尾を行うと、王女は蜂の国の命をつなぐ女王としての資格を得るのです。

新しい女王たちは11月のうちに木の洞や落葉の下にもぐって、やがて来る春まできびしい冬を越さねばならないのです。



博物館のつどい

映画と話で楽しい時間



博物館初めての試み、第1回「博物館のつどい」が9月21、22日、本館小講堂で行われた。これは映画と話の会で、両日はアメリカの自然科学博物館、国立公園、雲の話、マンガ、ニュースなどが上映され、学芸員海川先生より、国立公園と雲の話があった。参加者は市内の小、中学生が主で、両日の入場者は200名をこえ、映画とお話に有意義な2時間を過し好評であった。この「つどい」はこれから毎週土曜の午後2時と日曜の午前10時午後2時の3回行われ、映画、幻燈、紙芝居など博物館資料による学習で、小、中学生を主に一般まで含めた広い範囲の教育活動である。入場料は大人20円、小人10円



北アに初雪
 ○：9月19日 北アの鹿島連峯(後立山連峯)一帯に八合目まで白くなった。紅葉の山腹を初雪の下線が直線にチョン切る。
 ○：今年の七月であった。あの山陰で行き会った、クマ公もさぞ喰いだめに忙がしいことだろう。
 ○：刈入れを目前に、山麓の人々は、かぐら太鼓の音も賑々しく部落こそ豊作祭をくりひろげている。

山岳会

16

松下電器山岳会
大阪市守口局

健全な登山、普及指導、社内厚生運動の一環として昭和14年ラジオ工場の現場の人達で結成。近畿地方の山を探訪し続けたが戦時及び戦後しばらくは活動を中止していたが昭和22年新人をくわえて再編集し冬季スキー合宿、夏季登山にと活躍をはじめた。31年度の主なものをひろって見ると蔵王スキー合宿、比良(ひら)縦走など。その他映画会も開いている。博物館でモデル・ヒュツテをたて、他の山小屋の指導をしたらいかがかと思っ



ている。

お願い 本紙の購読御希望の方は1年分購読料170円(郵送料共)を現金書留または郵便為替、郵便切手で御送り下さい。 大町山岳博物館

郷土の民芸品

ゆきの子人形

冬、雪深き信濃路を訪れる人々は、人形のようにかれんな子供たちが、きっと印象に残るであろう。素朴な防寒ぼうやチャンチャンコに身をかためた子供たちは、雪投げや雪かきに余ねんがない。写真はのみやげ品。本館で発売している。



グループの会員募集

博物館同好会で

同好会では今までの歌声グループで、登山やハイキングなど行ってきたが、更に同好会の中に、いくつかのグループが生れることになりました。このグループは私たちの日常生活の必要から起る幾多の問題、生産あるいは趣味に結ばれたもの、これらについて初歩から共同で学び、実習や調査などの学習活動を通じて、お互の知識を深めることが目的であります。新しいグループは下記の通りです。
野草の会 詩歌、小説にてでくる草花、農作物と雑草、薬用植物、牧草、森林と野草などを調べ、生産を高め野草を利用する。
民俗研究会 郷土の風俗、習慣、方言、祭、風物史などの調査。
生活を美しく楽しくする染色の会 焔けつ染、型染、糊染などを自分で創造する。
星をみる会 月1、2回星座を眺め、楽しい一夜をすごす。
登山研究クラブ 登山史、遭難史、山小屋、山岳地形、山に関する伝説と信仰など山を科学的に歴史的に調べる。
農業気象クラブ 市内の気候的特性、気象観測、天気図、凍霜、稲作と水温など農業技術の科学的向上をはかる。
コケの会 コケの分類、生活史、利用面などを研究する。
 なお染色のグループでは9月23日午後1時博物館において第1回染色の話があり、10月6日には実習が行われる。

【博物館だより】 8月20日調査員会 23日~30日黒部上流自記雨量計中間点検(後立山、烏帽子、薬師方面) 25日日本山岳会楢有恒氏外来館 27日積雪科学館長勝谷稔氏外来館 9月1日 山岳博物館協議会 7日大町市教育関係職員会 11日同好会山の歌声の会 13日気象観測所設置作業 18日文化祭打合せ

【今月の寄贈】 イヌワシ1体南安徳高町牧井口恭一外2名 イシガメ1体大町市八日町平林悦夫 オオヨシゴイ1体大町市借馬石原学 ミノサザイ1体大町市常盤上一南沢平一郎 ノスリ1体大町市木崎遠藤直澄 アカシヨウビン1体北安美麻小学校 (敬称略)

編集後記 ▲初雪を向えた北ア連峯。その姿はまたかく別の美しさがある。毎年同じ時期になると同じようになり返される姿であるが、年毎に変わった美しさを感じられる。もっとも初雪の放射能の量も年毎増加しているであろうか?.....▲変わらないのは、ただ本紙の編集のまざさである。編集子はなはだ恐縮のいたりと感じる。▲ところで本号はクロスズメバチの生活を取りあげてみた。スキの原を飛んでゆく一匹の働き蜂も、彼らの社会の中で彼らの社会を守るために、分に応じた生活を営んでいるのである。

山と博物館 No.21 1957.9.20発行
 発行所 大町山岳博物館
 長野県大町市神楽町電話211番
 印刷所 信州印刷株式会社

山と博物館

NO 21号 1957年の月20日号正誤

第三面写真最下段左と中央の写真を入れかえる